

若手育成セミナー参加レポート

第5回 神経化学の若手研究者育成セミナー 参加レポート

東京医科歯科大学 医歯学総合研究科

器官システム制御学系専攻 生体調節制御学 幹細胞制御分野



須藤元輝

2012年9月29日から10月1日まで開催された第5回神経化学の若手研究者育成セミナー（以下、若手育成セミナー）に参加しましたので報告させていただきます。2008年より日本神経化学会大会に合わせて開催されてきた若手育成セミナーですが、私は今回初めてこのセミナーに参加させていただきました。ほとんどの方が初対面で、3日間を一緒に過ごすということに最初はかなり緊張していましたが、結果的には内容の濃いディスカッションを通じて、多くの先生や学生の方々と知り合うことができ、大変有意義な時間を過ごせたと感じております。

若手育成セミナーは大きくはグループディスカッションとフリーディスカッションに分かれています。グループディスカッションでは5つのグループに講師陣と学生が分かれ、グループごとのテーマに基づいた講義と討論が行われました。多くの興味深いテーマがある中で、私は御子柴克彦先生と小泉修一先生が講師を担当されているグループへの参加を希望しました。このグループのディスカッションテーマは「オリジナルな研究で世界をリードするにはどうしたらよいか」です。この時、自身の研究テーマへの展開力の不十分さに悩んでいた私にとってはとても魅力的なテーマでした。ディスカッションでは、学生から講師に対してそれぞれの研究生活に対する悩み相談や質問がありました。学生のような意見や考えを聞き、自分自身が悩んでいるように、みんなも同じように悩みながら頑張っているということを知れたことはとても励みになりました（写真1：グループディスカッション後の集合写真）。

フリーディスカッションではグループの枠を超えて、より多くの講師の先生や学生のみなさんと議論する機会がありました。このディスカッションを通じて、さらに多くの方々の意見や考えを聞いたことも今後の自身の展望を考える上で有意義なものでした。ディスカッションの最終日には、御子柴先生から直々に修了証を贈呈していただけたことにも感動しました（写真2：修了証贈呈後の集合写真）。

以下、私が今回の若手育成セミナーを通じて感じたことを、グループディスカッションとフリーディスカッションでの内容を踏まえて述べさせていただきます。個人的な見解や意見等が盛り込まれているかと思いますが、これを読まれる先生方にはどうか寛大な心で、今まさに様々な考えを吸収し成長しようとしている若者の考えの一つとして受けとめていただければ幸いです。

グループディスカッションでの御子柴先生、小泉先生による普段では滅多に聞くことのできないお話しは、私にとって大変有意義なものでした。自身の研究を展開していく上での心の持ち方や、私生活のちょっとした習慣のことまで、先生方の経験に基づいたお話をしていただき、現実感をもって理解することができました。印象に残った話が多過ぎて、その全てをここに書かせていただくことはできません。という

よりは、全ての話が繋がっていて、その全てをお伝えすることが難しいといった方が的確かもしれません。そのような中で、御子柴先生、小泉先生以外の他の先生方のお話も聞き、私が一貫して感じたことは、研究者には「バランス感覚」がとても大切であるということです。グループディスカッション中も学生からの質問（実験、研究室の環境、論文執筆、学会発表等のあらゆる事に関するもの）の中で先生方が答えを導き出すことが難しいと考える内容がいくつかありました。そういう問題に自分自身が遭遇した時のさじ加減や判断力が大切なのではないかと感じました。これはかなり抽象的な感想になるかと思いますが、それ故に自身のあらゆる場面で非常に重要な考えであるとも感じております。

グループディスカッションの中で、御子柴先生は「孫子の兵法」という書籍を薦めておられました。「孫子」とは、2500年ほど前、中国の孫武という兵法家によってまとめられた兵書であります。現在、「孫子の兵法」を学ぶ人々が増えており、その考え方があらゆるビジネスシーンで適用されているようです。学会から帰宅後、私も数冊を手に取り読ませていただきました。私がこれらの書物を読み感じたことは、「妥当解」を提示することの重要性です。要は先に述べさせていただいた、さじ加減やバランス感覚を磨くということと同じ意味合いになるのですが、私たち研究者にも一種の文系力のようなものが必要であると感じたのです。それは私たち研究者のように、緻密な実験を重ね正確な現象を突き止めようとする者にとっては、ある意味ではとっつきにくいようなものかもしれません。しかし、私たちが今後、何らかの問題に遭遇した時に、自身の経験や他者の意見を踏まえ、だいたいこの程度が妥当であろうという解を提示することの必要性、その妥当解の精度を上げていく必要があるように感じたのです。そして、たとえその妥当解が間違っただけのものであっても、結果としては悪い方向には向かわせない道を選択することが大切なのだと思います。さらに難しい能力とはなりますが、その妥当解の中にどれだけ自身のオリジナリティーが込められているのかという別の視点も持ち併せられると、当初のグループディスカッションのテーマでもありました「オリジナルな研究で世界をリードするにはどうしたらよいか」という疑問に対する一つの妥当解が生み出せるのではないのでしょうか。

小泉先生が講義の中で「一流の研究者は一流の趣味を持つ」とおっしゃられていました。趣味とはその人自身が楽しみとしてする事柄であり、一見研究のオリジナリティーとは関係が無いようにも思えます。しかし、研究のオリジナリティーとは実はこのようなことが理由で生まれてくるものなのかもしれません。つまり、その人が今まででどういったバックグラウンドで人生を歩んできたかというところに研究のオリジナリティーは左右されるのではないかと思ったのです。研究以外のことにも目を向けて、あらゆる方法論や概念を抽出し、また自身の研究に活かすということが、オリジナルな研究をする上で大変重要な位置づけを占めるのではないかと考えられました（逆の発想をすれば、研究での方法論や概念もまた別の事象に適応できる可能性があるということです）。色々な知識を再統合し、自分の環境に置き換えて、その妥当解を導き出すことが出来れば、そこにオリジナリティーは生まれるのではないのでしょうか。御子柴先生は「言葉は分化のエッセンス」とおっしゃっていました。具体的には、情報の吸収と発信は英語で行い、物事を考えるのは日本語で行うということだそうです。これもつまりは、私達が日本人として人生を歩んできたというバックグラウンドを最大限オリジナルな研究に活かすための方法であると思えました。

また、御子柴先生のお話の中で、自分に向いているものと、向いていないものを大学院生活中に見つけることはとても大切なことだというお話もありました。確かにそれが分かれば、人生を有意義なものにする

ることができると思いますし、そのことを考え、答えを導き出す努力はとても大切なことだと思います。しかし、自分に向いているもの、向いていないものを見つけることはとても難しいことだとも思っています。もしかしたら今後、自分が真に研究者に向いているのか分からないまま、研究生を送っていくこともあるのではないかとさえ思えてきます。

ここで大切なことは「変化することを恐れない」ことだと、ディスカッションを通じて再認識することが出来ました。具体的には、自身で考え出し、自身が良いと思ったあらゆる妥当解をとにかく試し続けるということです。試してみることに失敗は無いはずであり、試すこと自体を怠ってはい自分に向いているものを見つけることさえできないのではないかと思います。とにかく試行錯誤を繰り返し、その成り行きを見守っていった先に上手くいったものがあれば、それが自分に向いているものであると言えることが出来るのではないのでしょうか。

今回レポートを作成するにあたり、私に様々な素晴らしい考えをご教授してくださいました神経化学の若手研究者育成セミナーの関係者の皆様、その考えを発表させていただく機会を与えてくださいました日本神経化学会の関係者の皆様、そして私の研究をオリジナリティーのあるものにしようと日々多くのディスカッションして下さる東京医科歯科大学 幹細胞制御分野のメンバーの皆様我心より感謝申し上げます。

(参考図書)

- 1、超訳孫子の兵法 許成準 彩図社
- 2、孫子の兵法 守屋洋 三笠書房
- 3、「孫子の兵法」のことがマンガで3時間でマスターできる本 安恒理、田中豊 明日香出版社